

一般演題

# 開設14年江戸川区口腔保健センターでの摂食嚥下指導の取り組み



○清水畑 倫子(東京都江戸川区歯科医師会),  
外園 智唯(江戸川区口腔保健センター), 今井 昭彦, 金栗 勝仁,  
古川 隆彦, 田村 朗, 田村 純治, 子安 裕之, 小笠原 剛司, 末吉 正幸,  
柵山 泰昭, 長嶋 和浩, 鹿野 敏和, 福田 喜則, 川野 浩一, 齋藤 祐一  
(東京都江戸川区歯科医師会),  
佐藤 光保, 植田 耕一郎(日本大学歯学部 摂食機能療法学講座)

## 【緒言】

当センターは、江戸川区が施設を建設、江戸川区歯科医師会が管理運営を行っている。1名の専任歯科医師、常勤3名の歯科衛生士のほか、障害者(児)歯科診療の研修を受けた区会員の歯科医師、歯科衛生士が輪番制で診療にあたる。センター内は、診療室の他に全身麻酔特殊歯科診療室、相談室兼摂食嚥下指導室、研修室、および地域医療連携支援室がある。摂食嚥下リハビリテーション外来は、平成16年9月のセンターの開設と同時に月2回設置した。平成18年4月からは某特別養護老人ホームにて月1回訪問指導を開始し、平成19年12月より、外来にて区内知的障害者支援施設利用者対象の摂食機能検診を実施している。開設より14年が経過した当センターでの摂食嚥下指導の取り組みおよび診療実績を報告する。

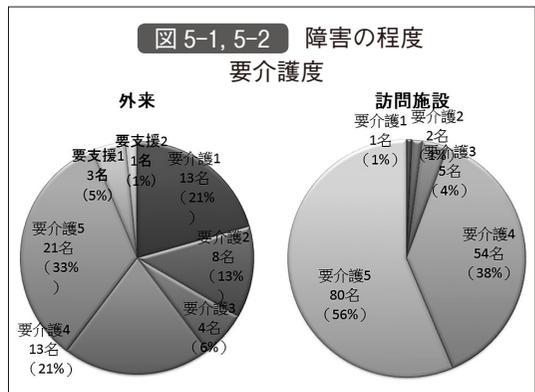
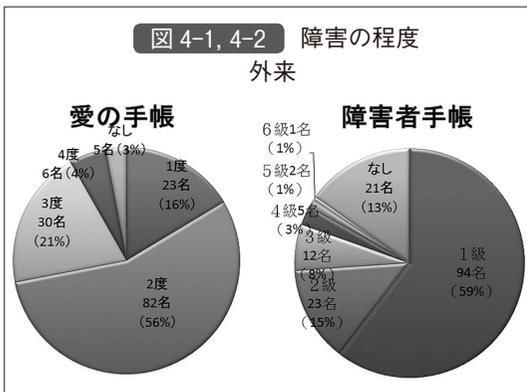
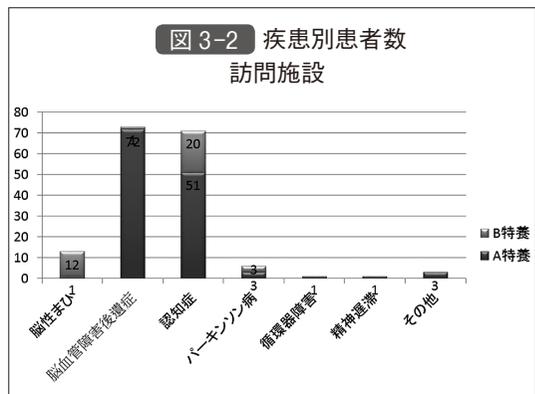
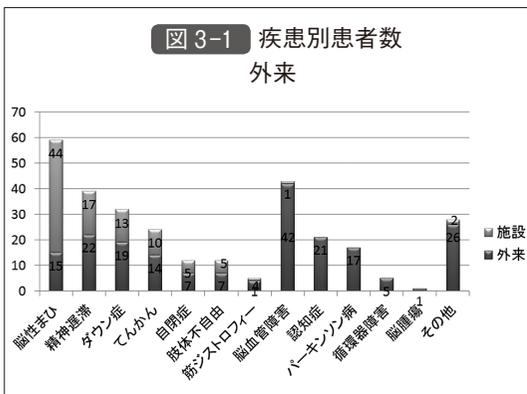
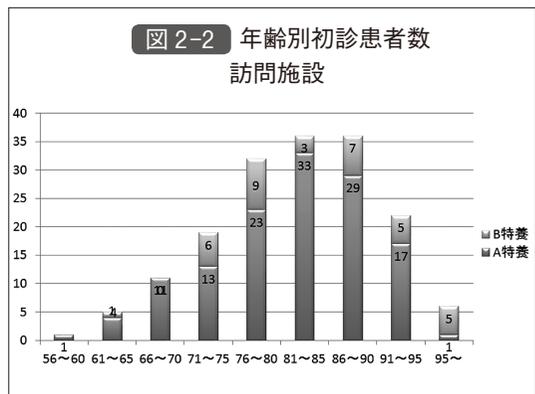
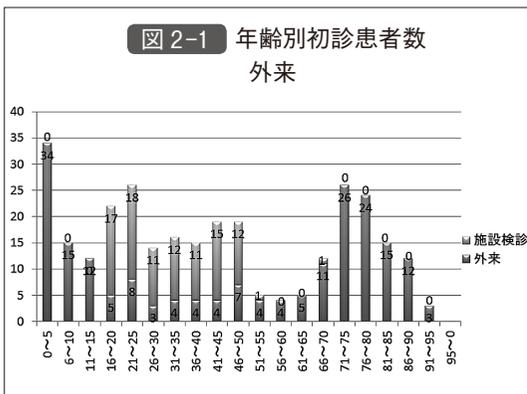
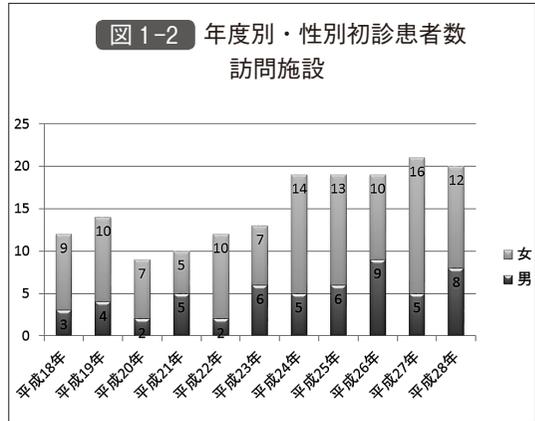
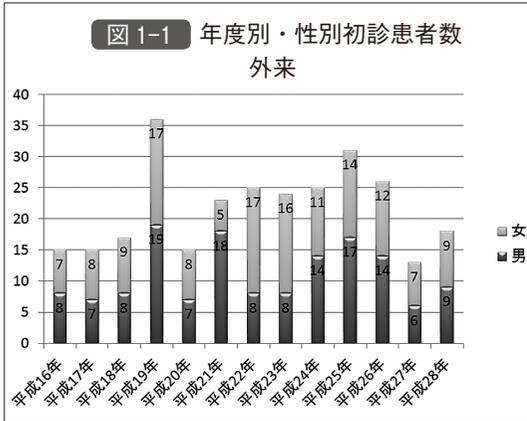
## 【対象および方法】

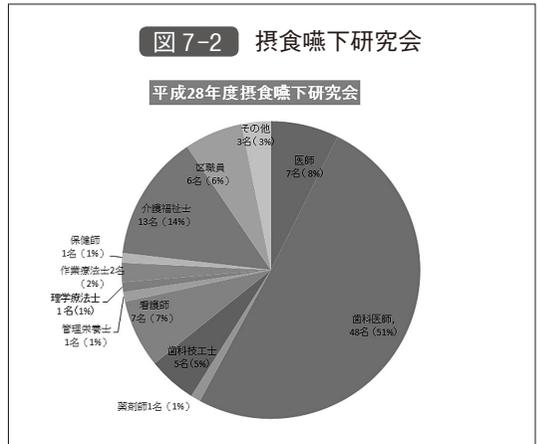
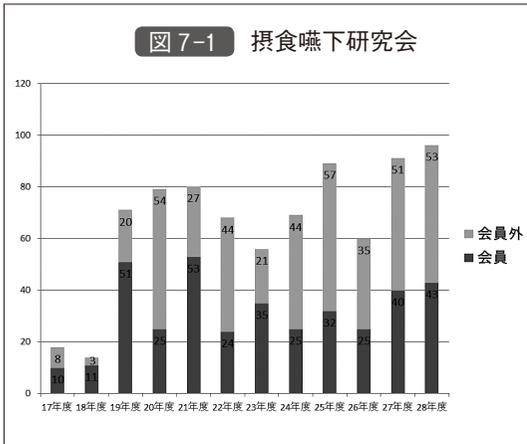
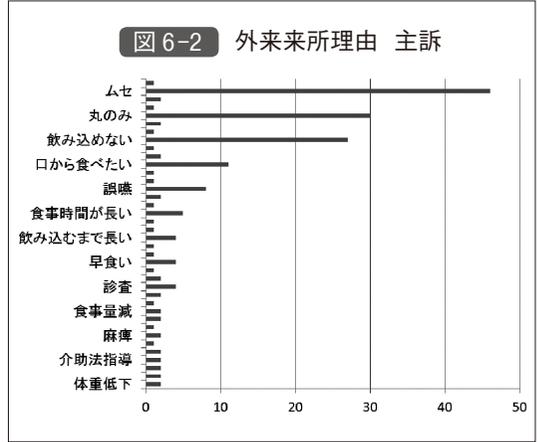
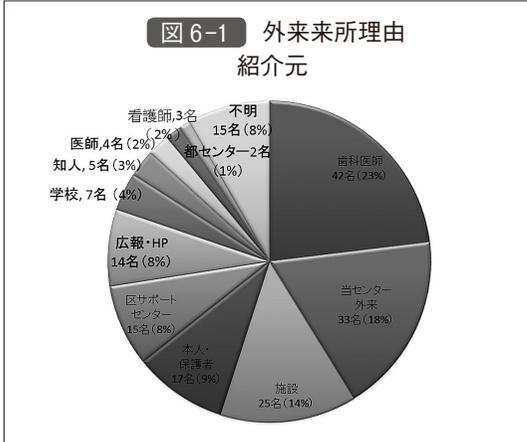
対象は、平成16年9月から平成29年3月まで当センターに来院して摂食嚥下指導を行った468名(一般外来202名、支援施設利用者の外来98名、訪問施設168名)である。調査項目は①性別と年齢 ②年度別患者数 ③疾患別患者数 ④障害の程度 ⑤来所理由とした。さらに研修事業として介護者

向け口腔ケア研修をセンター内の研修室にて年2回、多職種連携のため、歯科医師会館にて摂食嚥下研修会を年2回開催した。

## 【結果】

対象者468人の平均年齢は外来受診者46.9歳、支援施設受診者32.7歳、訪問指導受診者82.2歳であった。年度別初診患者数は増加傾向にあり、男女比は訪問において女性が男性の2.1倍多かった(図1-1、1-2)。年齢別初診患者数は、外来において5歳未満と71歳～80歳の2つのピークがみられた(図2-1)。疾患別では外来患者の20.2%が脳性麻痺で、次いで脳血管障害14.2%であった(図3-1)。訪問施設では43.7%が脳血管後遺症であった(図3-2)。障害の程度では、56%が愛の手帳2度、59%が障害者手帳1級であった(図4-1、4-2)。要介護度は、外来33%訪問施設56%が要介護度5であった(図5-1、5-2)。外来来所理由の主訴ではムセ22.5%丸のみ16.5%の順で多かった(図6-2)。研修事業として介護者対象、専門多職種対象、歯科関係者対象に摂食嚥下研究会を開催した。中でも医科との共同開催の摂食嚥下研修会は計12回参加総数791名の多職種の参加があった(図7-1、7-2)。





**【考察】**

当口腔保健センターでは地域の歯科医院で治療を受けることが困難な障害者を対象としている。年齢別初診患者数において示された2つのピークは、地域各機関からのニーズを表した。来院理由において近年では、支援施設職員やケアマネジャー等の関連職種からの紹介が増加しており、連携機能として当センターの役割の浸透と、研修

事業の効果が考えられる。今後も地域密着型医療を担い、更なる区民への生活支援に努めていくと共に将来の高齢化や障害の重度化を考慮し、通院困難な患者さんへの対策等を整備していく所存である。現在、全身状態管理の内科との連携、診断の連携、紹介方法が課題であり、対処を検討している。